

出張報告書

作成日：平成 15 年 1 月 22 日水曜日

会議名	ケニア中等理数科教育強化計画 個別本邦長期研修員、担当教授訪問	場所	鳴門教育大学 学校教育実践センター 佐藤助教授研究室
日時	平成 14 年 12 月 26 日(木)13:00 ~ 15:20	記録者	服部 浩昌
出席者	鳴門教育大学学校教育実践センター長 齊藤昇教授(Ms. Nancy 担当) 鳴門教育大学自然系(理科)教育講座 佐藤勝幸助教授(Mr. Kizito 担当) Ms. Nancy Wambui Nui (数学教育) Mr. Edmond Makoba Kizito (生物教育) 国際協力事業団 四国支部 菊池太郎職員 ケニア中等理数科教育強化計画専門家 服部浩昌		
配布資料	ケニア中等理数科教育強化計画概要(和文・英文)		
面談概要			
<ul style="list-style-type: none">・ 最初の一時間(13:00 ~ 14:10)は齊藤教授とナンシー研修員、あとの一時間(14:10 ~ 15:20)は佐藤助教授とキジト研修員とに面会した。(菊池職員同席の下)・ 両方も最初の 20 分はプロジェクトの概要を説明し、後の時間は現在の研修状況の聞き取り、今後の研修計画について話し合った。・ 両担当教授ともプロジェクトの内容についての話しを聞くのは初めてであった。・ 今後の研修については、できる限りプロジェクト活動の主旨にあった、数学、理科教授法を中心にした内容で進めていくということで、協力していただけることになった。			
ナンシー研修員についての面談			
<ul style="list-style-type: none">・ 齊藤教授は以前ラオスの短期専門家をされた経験があり、国際協力事業団の事業内容(短期、長期研修員受け入れ)についてはよくご存知であった。・ 齊藤教授は学校教育実践センター長と学長補佐を兼ねられているため大変多忙であるが、できる限り論文指導したいとのことであった。・ 齊藤教授のゼミには現在フィリピンからの国費留学生(大学院生)が二名在籍しているということであった。またゼミ内での英語でのコミュニケーションも問題ないとのことであった。・ 齊藤教授は数学教育学がご専門で、修士論文のテーマがプロジェクトの活動内容に直接生かすことが期待できた。ただし、短期の研修員とは違い、修士の学位取得が第一義のため、修士論文の内容が帰国後のプロジェクト活動に直接的に生かせるかどうかは現時点では約束できないとのことであった。・ 学校調や授業見学、学会参加については自主的に自費での参加となるので、参加するかどうかは本人のやる気次第であるということであった。(平成 14 年度から生活手当てが増額となった代わりに、学会等参加費は自費での負担となった。)ただし、そのような行事への参加の機会はたくさんあるとのことであった。・ 教育論、統計についての知識については、修士論文の作成の過程で習得できるということであった。また SPSS(統計ソフト)については研究室において日常使用しており、ケ			

ニア帰国後すぐに業務で使用できることが期待できた。

- ・ 齊藤教授によるナンシー研修員の修士論文作成上のポイントは次の三点である。 教師の指導力を高める方法、 生徒の創造力を活性化する方法、 基礎的内容を理解させる方法。
- ・ ナンシー研修員は現在日本語を研修中であり、順調に日本語を習得しているということであった。また授業の無いときは学内の図書館で自習しているとのことであった。日常生活では、自転車に乗れるようになったので、通学や買い物には自転車を使用しており、食事についても日本の食事に慣れたようであった。昼食は学内の食堂でカレーや麺類を食べているとのことであった。

キジト研修員についての面談

- ・ キジト研修員（大学院一年）は必須科目の単位取得も順調であり、また修士論文のテーマも丁度決定したところであった。テーマは以下のとおりである。
The perception of staff development by Japanese science teachers as a means of improvising their professional ability
- ・ 心理学 教育学等の科目については単位取得に大変苦労したが、それは授業が日本語中心に行われたことからであった。しかし生物学等の理科系科目については問題なく学習でき、逆に他の留学生に教えているくらいであった。担当教授もその点では非常に助かっているとのことであった。
- ・ 佐藤教授の専門分野は細胞生物学で、学部生、大学院生とも研究テーマは原生生物学に関するものであるが、キジト研修員については新しい試みとして、修士論文のテーマに理科教育学に関するものを取り上げるということであった。
- ・ 現在単位取得に集中しているが、空いた時間を利用して高校生物の教科書を英語に翻訳する作業を行い、それについては終了したとのことであった。
- ・ キジト研修員については学会参加費が国際協力事業団から支出されるので、佐藤助教授としては色々な行事にどんどん参加させたいとの意向であった。特に大阪や広島の教員研修センターについては見学の機会を作りたいとのことであった。
- ・ 佐藤助教授にはプロジェクトで提唱している ASEI アプローチ（種々の活動や実演、日用品等で工夫した道具を使った実験を授業に取り入れて、生徒中心の授業をすること。ASEI は Activity, Student-centred, Experiment, Improvisation の頭文字）について理解していただいた。修士論文の内容に、ASEI の考え方を取り入れた授業計画や工夫した理科実験について盛り込んでいきたいとのことであった。
- ・ キジト研修員はプレゼンテーションの経験もあり、また生物学等についても知見も深く、生物学に関する発表や ASEI の考え方を取り入れた授業の実演をゼミや先生の前でやってみることを提案した。

面談後所感

- ・ 両担教授とも研修員のケニアでのプロジェクト活動内容を理解できたことは、今後の研修計画を立てる上で非常に有意義であったとの認識であった。
- ・ プロジェクトとしても日本で研修した（修士の学位を取った）内容が、帰国後に直接的に、効果的に生かすことができるようになった点で、今回の訪問は非常に有効であった。
- ・ 研修員研修を管理している国際協力事業団四国支部としても、プロジェクトの担当者が直接説明に来たことで、大学側、事業団側の認識がより深まり、今後の研修管理に非常に

役立つとのことであった。

- ・ 学内は南アフリカやガーナなど留学生が多数おり、普段から交流が行われていて、研修環境としては非常に良い印象を持った。
- ・ 日本語研修を受けているとは言え、日本語での授業は研修員にとって苦勞しているところであるが、半分英語をつかって行う授業や授業後の補講など、教官や周りの学生の努力、支えによって研修員は学業を続けているようであった。大学側の不断の努力に感謝したい。
- ・ 今回初めて長期研修員を送り出す側が研修先に赴き、研修員の研修内容について話し合い、プロジェクトの要望を伝える試みを行ったが、これは研修員の送り出し側、受け入れ側の双方にとって非常に有益で、今後の研修に効果的であることが認識された。2年の研修期間を有効にしていくためにも、今後もこのような取り組みを行っていくことは大変重要なことだと思われる。

以上